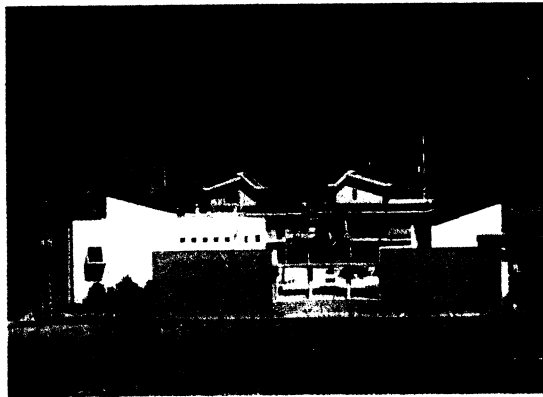


ISBN4-7601-2252-4

C0021 ¥2000E

定価(本体2,000円+税)



ナヌムの家歴史館ハンドブック

나눔의 집

ナヌムの家歴史館後援

ナヌムの家歴史館
ハンドブック

나눔의 집

나눔의 집

ナヌムの家歴史館後援会 編

つづき ☎048-2424

横浜市立図書館



2027754620

210.7

柏書房



チドリ
池石伊ハルモニ

1923年6月5日(旧暦)、慶尙北道慶州市で7人兄弟の長女として生まれる。

家族は土地を借りて田んぼを耕していた。安康普通学校を卒業し、18歳のとき結婚した。その後、夫の家族とともに日本へ渡り4年ほど住んでいたが、夫が徴兵されるや朝鮮に戻り、実家の農業などを手伝いながら生活した。22歳のとき、村に30歳くらいの女性(朝鮮人)がやってきて、中国の紡織工場で働く人を募集するというので、志願して、1945年3月、汽車に乗り中国に向かった。

東寧でバスに乗り換え着いたのが石門子慰安所だった。騙されてきたのが悔しくて毎日泣き暮らした。慰安所の建物は古く、雨が降るとすぐ漏れだした。順番で薪を取りに行ったが、大変寒く苦勞した。中国にきて実家に手紙を出したが、その後、弟から父が亡くなり、家族がバラバラになったとの知らせが届いた。

慰安所では「ひさこ」と呼ばれた。「ひさこ」はそこで付けられたのではなく、結婚後、日本で住んでいたときに姑がつけた名前である。朝鮮からハルモニを連れてきたのは慰安所の主人(日本人)の妾だった。慰安所には7~8名の女性がいて、軍人が毎日やってきた。週末には食事を取る時間もなく、軍人の相手をさせられた。軍人は女たちに乱暴を働いたりした。食事はコーリャン飯と大根の漬け物くらいしかなく、まずくて喉を通らなかつた。故郷の慶州では粟もコーリャンも見たことがなかつた。

その後ソ連軍が進撃するという噂が広がり、日本軍がバツタリ来なくなり、慰安所の主人は姿をくらました。ハルモニは一緒にいた女性たちと避難する途中、一行にはぐれてしまい、中国に残った。解放後、お金もなく国に戻れず、中国人と結婚した。子どもを産むと永遠に国へ帰れないのではないかと思い、3人を流産させたのちに、一男一女をもうける。娘は教師になり、息子は農業をやっている。8歳年上の夫は1996年に亡くなった。

中国と韓国との国交が結ばれ、自由に往来ができるようになってから韓国の赤十字を通じ韓国の兄弟の居所を知り、手紙などで交流を続けながら帰国の道を探った。しかし兄弟たちの生活が苦しく、身元を引き受けてくれる人がいなかったため、一時は帰国を諦めていたが、「ナヌムの家」とつながり、ようやく

帰国の道が開かれた。

2000年6月1日、李玉仙ハルモニとともに帰国し「ナヌムの家」で生活している。「ナヌムの家」で他のハルモニたちと共同生活しているうちに、忘れていた韓国語を少しずつ使いはじめた。ハルモニは耳鳴りがひどく頭が痛いといい、口数が少ない。車酔いのため、外出は嫌がる。カード占いが好きで、中国から帰国した姜日出ハルモニと中国語でおしゃべりするのを楽しんでいる。最近是中国にいる家族への恋しさが募るばかりのようだ。



イオクソン
李玉仙ハルモニ

1927年(戸籍上、1928年)10月10日、釜山市寶水洞で6人兄妹の2番目として生まれる。父は日雇い労働、母は下働きなどをしてしたが、それでも糊口をしのぐのがやっとの貧しい家庭で育った。学校に行くことは考えもできなかったが勉強がしたくて、12歳頃から学校に行きたいとせがんで殴られたりもした。

そんな折、14歳(40年春)のとき、お金も稼がせてやるし、勉強もさせてやるといわれ、釜山の波止場近くの小さな飲み屋に養女として売られていった。そこで半年あまり暮らしたが、働かされるのみで学校にも行かせてもらえないので逃げ出したところ、再び捕まり、今度は蔚山の飲み屋に売られた。

1942年7月中旬の夕刻、使いに出された際に、朝鮮人男性2名に捕まり、中国の延吉にある空軍部隊の東飛行場に連れて行かれた。そこでは1年ほど下働きをさせられたが、その間日本軍人たちから日常的に強姦された。その後一緒にいた女性たち全員が延吉市内にある慰安所に移され、3年ほど「慰安婦」生活を送った。

慰安所は狭く、10名あまりいた女性が入りきれず、1部屋に2~3名が入った。初めは部隊内の庭にゴザを敷いて使うこともあったが、突然軍人たちが部屋に入ってきて、他の同僚が見ている前で獣のように女性を強姦した。そこにいるときはサック(コンドーム)も使わず、性病検査もなかつた。妊娠した女性が1人いたが、子どもが生まれると、日本軍人が連れ去ったという。しばらくして近くに慰安所が新築されて引っ越したが、そこでは1人に1部屋ずつ当てがわれた。

ここでは週に1回ずつ数名の軍医官がやって来て性病検査をした。梅毒にか

かったが、606号注射を打たれても完治せず、管理人が水銀を身体に当てて治療し、その後不妊症になった。性病は無料で治療されたが、他の病気の治療はしてもらえなかった。使いに出た際、朝鮮人の警官に殴られて鼓膜が破れ、耳から膿が出るなど酷い状態だったが、治療を受けることができず、今も耳がよく聞こえない状態だ。

16歳くらいのとき、慰安所で初潮を迎えたが、生理中も軍人の相手をさせられ、週末には25名ほどの軍人を相手にした。言うことを聞かないときには革のベルトで鞭打たれた。

戦争が終ると、慰安所管理人が「慰安婦」たちを山に残して逃げてしまったので、市内に出た。それからは生きる糧も無かったが、延吉の東飛行場に報国隊としてきていた朝鮮人男性と出会い、結婚した。しかし、夫が解放前に勤労奉仕隊長として日本に協力していたことが問題となり、夫だけが朝鮮に逃げ帰ってしまった。その後10年間婚家で暮らした後、姑の勧めで再婚した。

夫の連れ子を育て、韓国に帰国するまでは痛風にかかった夫と、息子の子2人を学校にやるなど、実質的な大黒柱の役割をした。

1999年末、夫が亡くなってから帰国を決意、2000年6月1日、池石伊ハルモニとともにナムムの家に来た。物事の分別をわきまえ、常に他人に配慮して行動する。特に、向かいの部屋の金君子ハルモニと一緒に教会に通い、姉妹のように頼っている。また、勉強できなかったことが今も悔まれるのか、聖書や小説などを分厚い老眼鏡をかけて熱心に読み、勉強している。



パクオクリョン
朴玉蓮ハルモニ

1919年（戸籍上、1920年）4月20日、全羅北道茂朱郡で農業を営む両親のもと、6人姉妹の3女として生まれる。普通学校に2年生まで通ったが、学校に行くのが嫌でやめ、その後夜学でハングルを学んだ。

16歳のとき、貧しい家に嫁いだものの逃げ帰り、18歳（1936年）で再び金持ちの家に後妻として入る。夫は家柄が良く財産もあったが、非常に嫉妬心が強く、酒が入ると殴られた。2年後の20歳のときに息子を産んだ。夫は2年間、日本に出稼ぎに行き帰ってくるとさらに猜疑心も酷くっており、虐待を受けたあ

げくには息子を取りあげ、業者にハルモニを売り渡した。23歳になった年（1941年）の10月頃だった。

ソウルにある紹介所で慰問団の募集の噂を聞いて、夫が受け取った身売り金を早く返し、強制的に別れさせられた幼い息子と一緒に暮らしたい一念で志願した。野戦病院で軍人たちの服を洗濯したり負傷軍人を看護したりする仕事で、およそ3年も働けば借金も返せるとのことだった。ソウルを出発した後、釜山を通過して下関まで行き、そのまま軍艦で1カ月半かけて到着したのが南太平洋最南端の激戦地バブア・ニューギニアのラバウルだった。

軍人を相手にするなど、夢にも思わなかった。食事のとき以外は部屋から出ることもなく、内から戸を閉めた。慰安所の主人が探しにきては「そんなことをしてどうやって借金を返すつもりだ」と脅した。逃げようにも四方を海に囲まれていて、逃げることもできなかった。

「しずこ」と呼ばれ、1日に20～30人ほどの相手をしながら「慰安婦」生活を送った。軍人には必ず日本語を使えと、慰安所の主人から熱心に日本語を教えられた。性病にかかる人も多く、野戦病院から週に1度、検診に来た。性病にかかるとう606号注射を打って1週間ほど治療を受けるが、このときばかりは「休暇」の札を下げることができた。ハルモニは、生理のときにもそうしたようだ。

1944年に帰国した。故郷では両親が生きていた。子どもに会いに行こうとしたが、母に止められた。その年、面（村）事務所の戸籍課で働いていた人の後妻に入った。子どもは産めないものと思っていたが、結婚してすぐに子どもができて、1男2女をもうけた。

ハルモニは、子ども、特に孫に対する愛情が厚く、子どもたち以外の他人からは誕生日の祝いさえも受けようとしないう風変わりな性格の持ち主だ。普段は冷静沈着で物静かだが、客が来て一言求められれば、日本が一日でも早く賠償しなければこれから何世代にも渡ってその罰を受けるだろうと怒鳴りつけたりもする。よく笑う反面、際立って口数が少ないが、時に気骨のある一言を声に出すなど、ナムムの家での年長者としての役割を十分に果たしている。

ハルモニは食欲がなくてもご飯をゆっくり噛んで食べ、タバコを一服吸ってから散歩に出る。いつも、一人暮らしをする長女のことで心配が絶えなかったが、2000年6月1日からナムムの家の炊事係を任せられ一緒に暮らすようになった。今は、ひとつの悩みが解消され、平安に過ごしている。